

最優秀賞

日本放送協会横浜放送局長賞

お手伝い

横浜市立潮田小学校（鶴見区）

四年 狩 俣 宝 良

ぼくは、スイミングに行く時やお母さんと買物に行く時などでバスや電車などの公共交通機関をよく使います。

スイミングの帰りにバスを待っていました。ぼくとお母さんの前に車イスのおばあさんと車イスに手をかけているおじいさんが並んでいました。ぼくは「どうすればいいのかな、バスが来て乗る時に声をかければ良いかな、なんて声をかければ良いのかな。」と頭の中で考えていました。すぐ後ろにいるのだから「何かしなくては」と思っていました。

前にバスに乗っていた時のことです。途中から乗車して来た車イスの方がいました。その時は運転手さんがとても手ぎわ良く、固定されていたイスをロボットの手足をしまつて変形

させるように横にたたんでいどうさせていました。そして後ろのドアを開け、乗車しやすいように、歩道と同じ高さまでステップを下げて今度は運転手さんがおりて車イスを押して乗車してきました。さつきイスを窓側にいどうさせた場所に車イスのお客さんを案内していました。もう終わりかなと思ったら今度は車イスとバスの床をベルトで固定しました。ぼくは初めてみたので最初は「何をしているんだろう。」と思いましたが、最後まで見えていて運転手さんが一人ですべてやっていたので大変そうでした。

何がぼくに出来るんだろう。今回もそう思いながらバスを待つていました。車イスのおぼあさんとおじいさんの順番になりました。その時バスの運転手さんが中から「お手伝いすることはありますか？」と声が聞こえてきました。「大丈夫です。」と答えていました。

そうか、この一言がぼくには思いつかなかったのです。「お手伝い」これからはこの言葉を使って自分が出て来ることをお手伝いしていけたら良いなと思っています。